

いろいろな漢字表記の事例

(但し 本字を略字に、縦書きを横書きに替えている)

1. 倭人伝 陳寿

倭人在帶方東南大海之中依山島為國邑旧百余國漢時有朝見者今使詔所通三十國 (分ち書き無し)
倭人は帶方たいほうの東南の大海の中に在り 山島に依つて國邑とし もとは百余國 漢の時から 朝貢
があり 今 30 箇國が (女王國を通じて) 使者を通わせている

2. 古事記 太安万侶

1) 序文 (分ち書き無し)

於是天皇詔之朕聞諸家之所齎帝紀及本辭既違正実多加嘘偽当今之時不改其失未經幾年其旨欲滅斯
乃邦家經緯王化之鴻基焉故惟撰錄帝紀討敷旧辭削偽定欲流後葉時有舍人姓稗田名阿礼年是廿八為人聡
明度目誦口拂耳鞫心即勅語阿礼令誦習帝皇日繼及先代旧辭

是ここに天皇詔りたまわれいしく 朕聞われく諸家のもたらす帝紀及び本辭既に正実違あやまりい 多く虚偽を加うと
いえり 今の時に当たりて その失あやまりを改めずは 未だ幾年をも経ずして その旨滅びなんとす 是
すなわち邦家の經緯 王家の鴻基なり かれ (故に) 帝紀を撰録し 旧辭を討敷して 偽りを削り 実まこと
を定めて 後葉のちのちに流えむと欲つたう 時に舍人おも有り姓は稗田名は阿礼年とねりはこれ二八 人と為り聡明にして
目に度れば口わたに誦み耳よに拂るれば心ふに鞫しるしき 即ち阿礼に勅語して帝皇日繼及び先代旧辭を誦み習わ
しめたまいき

2) 歌謡 (分ち書き有り)

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻基微於 夜幣賀岐都久流 曾能夜幣賀岐袁
八雲立つ 出雲八重垣 妻籠つまごみに 八重垣作る その八重垣を

3. 万葉集 (分ち書き有り)

1) 柿本人麻呂

(2843) 愛 我念妹 人皆 如去見耶 手不纏為

うつくしみ わが思おもふ妹を 人皆の 行く如見ごとめや 手に巻かずして

(2845) 忌哉 語 意遣 雖過不過 猶恋

いむやとも 物語りして 心やり 過ぐせど過ぎず なほ恋ひにけり

(2850) 現 直不相 夢谷 相見与 我恋

現うつには 直ただには逢はね 夢にだに 逢ふと見えこそ わが恋ふらくに

(255) 天離 夷之長道従 恋来者 自明門 倭嶋所見

天離あまざかる 夷ひなの長道ながちゆ 恋ひ来れば 明石あかしの門とより 大和やまと島見ゆ

- (266) 淡海之海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所念
あふみ うみ ゆうなみちどり な
 淡海の海 夕浪千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古念ほゆ
いにしへおも
- (1271) 遠有而 雲居尔所見 妹家尔 早将至 歩黒駒
とほくありて くもゐに見ゆる いもが家に 早くいたらむ 歩め黒駒

2) 山部赤人

- (318) 田児浦従 打出而見者 真白衣 不尽能高嶺称 雪波零家留
 田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける
- (361) 秋風乃 寒朝開乎 佐農能岡 将超公尔 衣借益挨乎
あさけ
 秋風の 寒き朝明を 佐農の岡 越ゆらむ君に 衣貸さましを
きぬか
- (428) 隠口能 泊瀬山之 山際尔 伊佐予歴雲者 妹鴨有牟
こもりく はつせ
 隠口の 泊瀬の山の 山の際に いさよふ雲は 妹にかもあらむ
いも

3) 山上憶良

- (63) 去末子等 早日本辺 大伴乃 御津乃浜松 待恋奴良武
やまと
 いざ子ども 早く日本へ 大伴の 御津の浜松 待ち恋ひぬらむ
- (337) 憶良等者 今者将罷 子将哭 其彼母毛 吾乎将待
おくら
 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 吾を待つらむを
わかま
- (338) 駿無 物乎不念者 一坏乃 濁酒乎 可飲有良師
しるし
 駿なき 物を念はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし
もの おも ひとつき にご

4. 枕詞

しきしま 師木島 (古事記)、 しきしま 磯城嶋 (日本書紀)、 しきしま 斯帰斯麻 (法隆寺天寿国曼荼羅繡帳銘)